

〔再録〕『熊本県歴史の道調査 一人吉街道一』

熊本県文化財調査報告 第66集

(12) 大畠から県境まで(笠木越)

大畠の地名の由来は、普通焼き畠の木場から来ているといわれている。明治8年の『大畠村地誌』に「人家半ハ山間ニ住居シ焼畠ヲ專ニス」とあり、明治頃まで焼き畠が行われていたようである。

江戸期の大畠は『肥後国誌』に引く諸郷地竈萬納物寄に「一、軒数九拾九軒、内、一、八軒諸奉公。一、壱軒寺家。一、壱軒修驗道。一、五拾軒郷士。一、拾五軒百姓。一拾軒又百姓。一、拾貳軒町家」と、また、『明細記』大畠の中に町とあり、恵美須一宇、庄屋、高札、別当宅など四拾軒とある。

このように大畠は町として相良藩の南側の行政の中心であるとともに、島津を意識した軍事的役割と、薩摩との茶・煙草など物資の交易の拠点という2つの性格がみられる。

番所も小川内と笠原に設けられている。

国道に重なってきた街道は、大畠を迂回するため左にゆるくカーブする国道と分かれて真直ぐ進み、坂を下る。ここは大畠の入り口で「一の坂」と呼ばれている。弘治三年(1557)八月十一日、人吉勢と薩摩勢が戦い、薩摩勢を打ち破った所で、近くにその時討ち取った首塚がある。坂を下った右側に地蔵があり、台座に「天明二壬寅年(1782) 奉造立 六月二十四日 施主水俣守右衛門」の銘がある。以前は坂の中腹にあったものを現在地に移したという。台座が逆になっている。坂を下った街道は大畠町に入るすぐに四つ角に出る。街道は右に折れ、大畠小学校の北側に沿って進む。四つ角左手先に庄屋跡で現在石川氏宅がある。小学校の北側に沿って進むと右手に鈴野学校跡地の碑がある。大畠小学校の発祥地である。小学校の敷地の角まで進み左に折れ南へ向かう。折れずに坂を下ると大畠麓町へ出て、吉田越へとなる。南へ向かった街道は保育園の前に出る。ここは東から来た道と三又路を作っている。保育園の門の横に道標がある。高さ60cmの六角柱で「かくとうみち」、「ひとよしみち」、「ていしゃばみち」とある。ていしゃばみちがあるので、明治42年(1904)以降のものである。

南へ進むとすぐ右手に浄土真宗仏光寺派の大歓寺がある。山号は功德山で本尊は阿弥陀仏である。『球磨郡誌』に「京都市常行寺住職橋専明説教所設置の許可を受け、明治十一年(1878)大畠三徳院跡に説教所を設け、同十八年八月二十一日、寺号公称の許可を得て、大歓寺と公称するようになった。明治十九年、本堂建築を企て、同二十年七月三十日、之を竣工し遷仏法会を挙行した」とある。

街道は南へ250m行き、再び国道に出る。その手前右手奥に大山祇神を祠った山神社がある。

街道は750mほど国道と重なって進み、鳩胸川に沿って左に曲がる国道と分かれ、真直進み

急坂を下る。道巾は150cmほどとなる。坂を下った所で鳩胸川を渡る。ここを一の渡瀬といふ。『歴代参考』や『明細記』にみえる。小川内に入り300mほど進み、小川内川を渡って左岸に出る。現在はコンクリート橋の舟の鼻橋が懸っている。橋を渡るとすぐ左の木立の中にブロック造りの祠があり、中に高さ70cmの自然石を立てた水神が祭ってある。正面に「天文四己未天(1535) 南無水神塔 六月造立日 施主軍左衛門」と刻んである。更に200m進むと矢岳に向かう道が右手に分かれるが、左に進みすぐ小川内川を渡る。現在は「こごうちばし」がある。そこから100m行くと右手に石垣を築いた西川勝一宅がある。近くの河野斉可氏の話によると、ここが番所跡で、裏山の迫田を「番所裏」と今も呼んでいるということであった。『明細記』大畠に「笠木下御番所」とあるのがここである。享保三年(1718)の分限帳に大畠番として高田郡助以下四名の名がある。

街道は番所前を通り、南へ向かうとすぐ右手に新しい小川内公民館が建っている。その横に炭焼き窯がある。その先から右手に分かれた坂道を登る。道巾は180cm程である。雑木林に囲まれた急な坂を200mほど行くと、急にひらけて僅かな畠がある。車が通れるのはここまでである。

街道はここから道巾70cmほどの山道になり、笠置山(標高574m)の頂上に向かって尾根伝いに急な坂を登る。『球磨絵図』をみると曲がりくねった坂道になり、その先に笠木峠とある。笠置越と呼ばれている。地元の人は木馬路と言われ、以前は材木を出すのに使っていたという。

山道に入って、30分ほど登った標高450m付近の右側檜の植木の中に道から5m離れた場所に地蔵がある。自然石で祠を作り、その中に首が欠損し、かわりに丸い自然石を載せた地蔵が安置してある。像は首までの高さ30cm、台座は高さ9cm、巾、奥行きとも28cmあり、正面に「安政四己(1857)六月十八日 為二世安樂 大畠町 □蔵 建立」と刻んである。この地蔵について地元の人によると、古老から女の人が旅の途中ここまで来たとき、産気づき子供を出産した話を聞いたと言う。

街道は笠置山を過ぎ、更に稜線を南へ向う。ここには南の方から林道が延びてきているがこれと並行しながら進む。一部林道脇に街道の姿が残っている。頂上から1km余り言ったところで、国道のループ橋から矢岳に通じる林道に出る。ここから南のルートは今回の調査では確認することができなかった。

明治35年(1902)の大日本帝国陸地測量部五万分の一の加久藤を見ると、更に尾根伝いに南へ向い、旧国道堀切峠の西側500mのところで県境を越える道がある。また、加久藤トンネル熊本県側入口の西側旧国道沿いに「中の茶屋」という地名が残っており、現在旧国道から尾根に向かって中の茶屋林道が走っているところから大体この線に沿っているものと思われる。

国境には『明細記』に「御高札元々薩州境榜木迄一里三十一丁三拾八間」とあり、標柱があつたものと思われる。また、宝曆十一年(1761)の『御巡見使教令』に「日州加久藤境大畠毫里山

迄人吉札之辻より三里三拾丁」とある。「一里山」は確定することはできなかった。

(13) 笠原越

『明細記』の「新往還丁場之事」の項を見ると、道筋は庄屋元、阿どん野渡瀬、笠原御番所下渡瀬、道還渡瀬、千段川原、大葉山、めふと木山、大境となっている。

大畠小学校から笠木越と分かれて西へ坂を下りると大畠麓町に出る。右手の山は中世の大畠城跡である。そのまま行くと国鉄(JR)大畠駅へ向かう。街道は左へ折れて大畠麓町の中を通り。しばらく行くと右に行者堂がある。修験道の修業の道場で、関係古文書がある。左側には祠の中に青面金剛がある。胸部から上を欠損しているが、地蔵の形で補修してある。光背に「奉寄進 安政二(1855)卯歳三月吉祥日 施主新助」の銘がある。街道はその先を右に折れ、集落を通り、鳩胸川を渡る。周りは水田になるがこの付近を阿どん野という。以前番所の役宅があったというが今はその跡は残っていない。その先で大川間川を渡ると街道は山に入り、道巾も1mと狭くなる。300m行くと左側に石垣が残っている。その中央に石段があり、奥に建物の周りの石積みも見られる。一面竹と木が繁っている。笠原番所跡である。

街道は番所の前を通り、尾根を登り南へ向い、大葉山の東側を通って茶園にでる。ここから先は四谷にでるか、矢岳にでるか「めふと木山」を確定できず不明である。

(14) たかのす越

『明細記』の間道の一つとして「尾八重木之内飯野江之間道一筋有り此筋たかの巣越といふ田代村より尾筋山道田代庄屋元より大境迄二里貳丁廿六間ト云大畠より柴笠通堂ノ元江出ル會二里三間」とある。

このルートは大畠小学校のところから左へ曲がり、上田代町へ進み、右折して段塔へ向かう道を南に行くと左側に小さな水神社がある。その先を右に分かれて山道に入る。すぐ左手に山神神社があり、茅葺きの社殿がある。もう少し登ると馬頭観音が祠ってあり「明治廿三年(1890)二月吉日 建立田代村中」と台座にある。その脇を登り、尾根伝いに南へ進む。巾70cmの山道である。このあたりを地元ではえびのす越ともいう。尾根道はループ橋のところから東へ谷沿いに登ってきた梶原林道とループ橋から500mほどのところで出会う。しばらく林道に重なって東へ進んだ街道は一里谷の次の谷で南へ向い山を登りながら県境へ向かう。

県境には植林された中に雑木林が続いている。旧道の県境には高さ120cm、巾15cmの四角石柱があり、各面に〔 熊本縣 西諸縣郡飯野村境界標 〕 宮崎縣 球磨郡籠田村境界標 紀念 明治40年(1907年)9月建設 〕とある。

道を拡張したとき、ブルドーザーで押したとかで中ほどから折れて道の脇においてあった。

この石柱は、宮崎県の「歴史の道」調査報告書『肥後街道』にててくるもので、これにより

歴史の道をつなぐことができた。場所は梶原林道を県境(標識などなく、雑木林が目印)まで行き右手に比高で50mほど登ると山道が走っている地点である。



笠木下御番所跡（中央家部分）



笠木越の地蔵